

---

# 少女Aと僕の日常

クラッキー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

少女Aと僕の日常

### 【Nコード】

N59330

### 【作者名】

クラッキー

### 【あらすじ】

面倒くさがりだが、お人好しの高校生、武田和志。

最近、同じ夢をよく見る。幼い頃の自分と、同じ年頃の少女の夢。自分の記憶にないその謎の少女。彼女は一体誰なんだろう？

そんな時、転校して来た『少女A』。可愛いけど愛想のない彼女は、何か裏が有りそうだ。

友人達を巻き込み、和志の高校生活は、転校生の『少女A』に振り回され始める。

一体、何なんだ！僕の平穏だった日々を返してくれ！

## 夢の中の少女（前書き）

二つ目の作品です。

皆様の暖かいご声援、宜しく願います。

## 夢の中の少女

「大きくなったら私と結婚しようね。」

幼い頃の僕に、微笑み掛ける同じ年の頃の少女。

「うん、いいよ。」

幼い僕は、笑顔で答える。

そして少女は、僕にキスをする。

場面は変わり、

「私のこと、絶対に忘れないでね。」

涙でぐちゃぐちゃになった顔の少女。

「絶対忘れない。」

必死で涙を堪えながら答える僕。

ここでも少女は、僕にキスをする。

眠い目を擦りながら起き上がり、今朝の夢を思い出す。

最近、同じ夢を見る。

まだ三歳頃の僕と、同じ年頃の少女の夢。

あれは一体何なんだろう？

僕の記憶に、あの少女はいない。

僕が忘れてしまった記憶なのだろうか？

それとも僕の願望なのだろうか？

もし願望だったらちょっとヤバイな。

僕は苦笑いしつつ、学校へ行く支度を始める。

夏休みも終わり、今日から新学期が始まる。

いきなり遅刻するわけにはいかない。

僕は至って普通の高校生だ。

いや、普通だと思っているのは自分だけかも知れないが、普通であると思いたい。

運動は可もなく不可もなく。

成績は中学の頃は良かったが、そこそこの進学校に進んだ為、高校での成績は中の下といったところだ。

好きな女の子がいなくてもないが、告白する勇気もない。

勿論、女の子と付き合ったこともない。

九月になったからといって急に涼しくなるわけもなく、厳しい残暑の中、学校に行く為に駅までの道を歩く。

「おっはよー、和志！」

バシツと鞆で叩かれ振り返る。

黒髪をポニーテールにした制服姿の少女がいた。

「痛いから鞆で叩くなって言ってるだろ。」

「ボケっと歩いてるから目覚まし代わり！」

彼女の名前は高橋愛美。

何かと世話を焼きたがるメンドくさい奴。

コイツとは小学校から一緒だが、恋愛感情は全く抱いていない。

恐らく、向こうもそうだろう。

夢に出て来た少女も、コイツではない…はず。

だって愛美は、小学校三年の時に、うちの近所に引っ越して来たのだから。

「お前って三歳ぐらいの頃、うちの近所に住んでいたことないよな？」

念のため確認してみる。

「はあ？何言ってるの？私は小三の時に、こっちに引っ越して来たでしょ！和志は夏休みボケなんですかねえ。」

うん、やっぱり違う。

駅のホームに着くと、見知った顔をもう一人見つけた。

「あつ！おはよう、高橋さん！…何だよ、和志も一緒か…。」

「おはよう、水野君！」

愛美と一緒に来た僕を見つけて、あからさまにがっかりしたこの男は、水野健司。

見ての通り、コイツは愛美が好きだ。

愛美は健司の気持ちに気付いていない。

いや、気付いているのに気付かないふりをしているのかも知れない。

まあ、僕にとってはどっちでもいいことだ。

「そういえば、今日から転校生が来るらしいぞ。しかも女子！同じクラスになるといいなあ。」

どこでそんな情報を仕入れてきたのか知らないが、僕は健司の情報に対して、あまり興味を抱かなかった。

「同じクラスどころか、同じ学年とも限らないだろ。まだどんな奴か分からないんだから。」



愛美のことはいいのかよ！という言葉は黙っていてあげた。

「そうだけど、女の子の転校生なんてワクワクするだろ。和志は女の子に興味ないのか？」

「でも一年のこの時期に転校してくるということは、色々わけがありそうじゃないか？」

健司のバカな質問はスルーして、ふと疑問に思ったことを声に出す。

「何だよ、お前もやっぱり興味あるじゃん！このムッツリ野郎！」

うるせえ、そういう意味じゃないんだよ！

ただ何となく気になっただけなんだ…。

「もし一緒にクラスだったら、色々教えてあげなきゃ！仲良くなれるかなあ。」

出たよ！お節介の虫が。

楽しそうな愛美を見て、メンドくさいことにならなきゃいいなあ、と思った。

この時はただ漠然と…。

## 転校生の少女A

教室の前に着くと、健司は例の話で友人達と盛り上がる。

僕と愛美はその輪には加わらず教室に入る。

久しぶりの教室は何だかウキウキする。

「おはよう、武田君。」

「あつ、お、おはよう、山本さん。」

窓側の一番後ろにある自分の席に座ると、一つ前の席の山本純子さんに声を掛けられた。

この日、僕が浮かれていたのは、久しぶりに彼女に会えるからだ。

僕の憧れの女の子。

「相変わらず、高橋さんと武田君は仲がいいのね。」

あつ、えつ、違うんです、山本さん！アイツとはそついつんじやないです！僕が好きなのは…。

言葉に出来るはずもなく、山本さんの背中に虚しく話し掛ける…。  
心の中で…。

最悪だ…。

久しぶりに会った緊張のせいか、単純な挨拶はどもるし、愛美との仲は誤解されるし…。

彼女は肩まで伸びた黒髪を、後ろで二つに結んでいる清楚な感じの女の子。

僕と一緒にクラス委員をしている。

真面目で頭が良く、人望もある。クラスの女子も彼女の言うことは素直に聞く。

僕は彼女の笑顔に一目惚れした。

無理やり押し付けられたクラス委員も、彼女の笑顔とセットなら楽しくなる。

ふと横を見ると、僕の隣に机があることに気付く。

確か僕の隣は、誰もいないはずではなかったか？

…まさかねえ…。

「オラー！席に着けー。」

チャイムと同時に、クラス担任が教室に入って来る。

みんなが席に着くと、教室が騒つき始める。

先生の後ろから、見たことのない『少女A』が教室に入って来たからだ。

オイオイ…、マジかよ…。

「今日から新学期だが、その前に転校生を紹介する。彼女は色々な事情で、今月からうちの高校に編入してきた。」

先生は彼女の方を見て、挨拶するよう促す。

「青島あかりです。宜しくお願いします。」

ニコリともせず、無表情で少女Aが名乗る。

彼女は細身で、結構背が高い。無表情なその顔は、綺麗な顔立ちをしており、ちょっとキツイ目をしている。

背中まで伸びたその髪は、かなり茶色かった。

その髪の色は校則違反じゃないのか？

「彼女の編入試験は、非常に優秀な成績だった。お前らも負けなように。」

先生が話している最中も、彼女は無表情のまま顔色ひとつ変えない。可愛いけど随分と無愛想な子だ。というのが、僕の『少女A』に対する第一印象だった。

「席は武田の横だ。窓際の一番後ろで、間抜けな顔でお前を見ている男だ。」

先生に名前を呼ばれ、ビクツとする。

間抜けな顔は余計だよ！

やっぱり隣の席か…。

無表情の彼女と目が合い、ちよこつと頭を下げると、少し間をおいて、彼女が驚いた感じで、一瞬、大きく目を見開いた。

彼女の表情が一瞬だけ変わったのに気付いたのは、多分、僕だけだろう。

…そんなに嫌そうな顔をされると、傷ついちゃうよ…。

「それから分からないことや困ったことがあったら、武田に聞くといい。」

「えっ！」

思わず声が出た。

「お前、そういうの得意だろ？頼むぞ！」

チツ、得意なんじゃなくて、頼まれたら断れないだけだ！

「それから、武田の前に座ってる山本は、女子のクラス委員だから彼女も頼るといい。よし、それじゃ席に着け。」

先生に促され、こちらに向かつて来る彼女。

「あと青島！その髪は茶色過ぎる！黒くしてこいよ！」

「…。」

先生の注意に、返事どころか振り向きもせず、僕の横の席に座った『少女A』。

僕の方にも見向きもしない彼女。

何か、コエー奴…。

「以上で朝のHR終わり。この後、始業式だから体育館に集合！」

先生の合図で、ぞろぞろと体育館に向かうみんな。

僕は、何だかメンドくさいことになったなあ、と考えながらみんなの後を付いて行く。

後ろを振り向くと、『少女A』は一番後ろからみんなの後を付いてきていた。

始業式の後には、簡単な掃除をして、席替えをした。

…がしかし、

「武田と山本、青島の三人の席はそのままでもいいだろう。青島は転校して来たばかりだし、他の二人はお世話係だからな。」

先生の鶴の一声で、僕達三人の席はそのままになった。

『お世話係』ってなんだよ！

僕的には、また山本さんの後ろの席でラッキー……。。

イヤイヤ違うだろ…。隣にはメンドくさいことがあるじゃないか…。

この日は授業がないので、学校は午前中で終わり。

「…ねえ。」

帰り支度をしていると、横で声がした。

ん？僕？

突然、僕に声を掛けてきた青島あかり。

相変わらず、表情に変化はない。

「…な、な、何？」

テンパリ過ぎだろ僕。

「…あんた、名前何ていうの？」

「えっ！…武田…だけど？」

「違う！下の…。」

「…？和志…だけど。」

「ふーん…。」

そして彼女は僕に背を向け教室を出て行った。

彼女が「ふーん」と言った時、一瞬、微笑んだ気がした。

何だったんだ、一体？

混乱したまま僕も教室を出る。



愛美と健司と三人で帰りの電車に乗ると、当然話題は『少女A』の話になった。

「良かったな、健司。一緒のクラスになれて。」

茶化すように健司に話し掛けた。

「確かに可愛い子だったけど、無愛想だし何か裏が有りそうな奴だよな……。」

予想に反して乗りが悪い健司。

「私は可愛い子は大好き！早速、明日、友達になろうっと。」

お節介もいいけど、面倒だけは起こさないでくれよ愛美。

三人で話ながらふと周りを見渡すと、彼女がいた。

『少女A』こと青島あかりだ。

何気なく彼女の方を見ていると、彼女と目が合ってしまった。

ヤバイっ、と思って慌てて視線を反らす。

あれ？今、目が合った時、微笑まなかったか、彼女？

もう一度、彼女を横目でチラッと見ると、怖い顔で睨んでいた。

怖い顔というのは先入観かも知れないが、確かにこっちを見ていた。

ホントに何なんだよ、一体！

その後は彼女を見ることが出来なかった。

「じゃあな、健司！」

「バイバイ、水野君！」

改札を出て健司と別れた後、駐輪場をチラッと見ると、『少女A』は自転車に乗って走り去るところだった。

へーえ、同じ駅なんだ。

もしかしたら、僕の家に近いのかな？

何となく、そう思った。

思えばこれが、彼女に初めて興味を持った瞬間だったかも知れない……。

「和志はまたボーっとしてる！」

うるさい奴だ、愛美は。

「考え事くらい僕でもするんだよ！」

「どっせ、ヒロイことでしょ？このムッツリ男！」

うるさい。ホントにコイツはうるさい！

青島あかりのことを考えていたことは、愛美には気付かれなかった。

## 少女Aの黒い噂

「君の家って、この近くのの？」

幼い僕が、一緒に遊んでいる少女に話し掛ける。

「うん。」

うなづく少女。

「また明日も一緒に遊ぼうよ！」

「うん、いいよ！」

満面の笑みでうなづく少女。

「バイバイ、また明日！」

何度も振り返り、手を振る僕。

その少女も、笑顔で手を振り続けていた。

僕が少女と初めて出会った日の夢のようだった。

続けて同じ少女の夢を見るということは、僕はその少女に会ったことがあるのだろう。

僕が忘れしまったその少女は、一体誰なんだろう？

親しげに遊んでいた子なのに、忘れてしまった理由はなんだろう？

その日、事件は学校に着くとすぐに起こった。

「ねえ、青島さんで頭いいんだよね？どこの高校に行ってたの？あとそれから『あかり』って呼んでもいい？」

学校に着くと、愛美は『少女A友達化計画』を実行に移すべく、矢継ぎ早に青島さんに質問をぶつける。

彼女はそんな愛美に、一瞬、眉をひそめた。

愛美は彼女の表情の変化に気付かない。

ヤバイ、キレるかも！

本能的にそう感じた僕は、愛美を制するべく声を掛けようとしたが……。

「……さう……。」

遅かった……。

「え？なに、なに？」

彼女の言葉は、愛美には聞こえなかったようだ。

愛美のバカ！

「…うるさいって言ってんの！気安く話し掛けないで！」

彼女はそう言うと、教室を出て行ってしまった。

「…何よ…、あれ…。」

啞然とする愛美は、やっとのことでそう呟いた。

僕はメンドくさいことになったと、頭を抱えるしかなかった。

彼女は朝のHRには戻ってきたが、しばらくは近付く人がいなくなるかも知れない。

二日目にして僕はもうお手上げだ。

山本さん、後は宜しく…。

「ねえ、教科書見せてよ。」

その日の授業が始まると、青島さんに声を掛けられる。

彼女は、まだ教科書をもらっていないかった

隣に座っているのに、そんなことにも気付かないなんて、僕は朝の出来事にまだ動揺していたのだろう。

「あつ、ごめん、気が利かなくて。」

慌てて教科書を彼女の方に置き直し、机を少し寄せる。

あつ、また少し微笑んだ！

一瞬だけど、確かに…。

彼女も少し机を寄せてくる。

おつ、…謎のいいにおい！

近付いてきた彼女から、ほのかに香水？のにおいがした。

その日から当然のように、彼女は孤立する。

僕は何も出来ない…。

山本さんも、どうしたらいいか困惑しているようだ。

山本さん、役に立たない僕で申し訳ありません…。

愛美は、いきなり挫折した『友達化計画』を、早くも諦めたようだ。

「ねえ、和志。いきなりあの態度はないと思わない？」

その日の帰り道、愛美はかなり怒っていた。

「空気が読めないお前が悪い。」

だってあの時、青島さんは明らかに鬱陶しそうだったから。

「ふーん、和志は彼女の肩を持つんだ。」

愛美はそう言って拗ねてしまった。

女ってどうしてこつこつもメンドくさいのか…。

それから程なくして、青島あかりの噂が立ち始める。

転校して来た理由は、援助交際をしていたのが、学校にバレたから



だ。

妊娠して中絶したのが、周りに知られてしまったからだ。

先生と付き合ってたのがバレたからだ。

いや、先生を殴ったからだ。

根も葉もない噂とはこのことだろう。

「なあ、和志。青島の例の噂どう思う？」

健司は彼女の『黒い噂』が気になる様子。

「どう思っつて、あんなの嘘に決まってるだろ。第一、彼女の前の学校すら誰も知らないだろ？彼女は何も言わないし…。」

「…まあ、そうなんだけどな…。」

健司もどうにも歯切れが悪い。

新学期が始まってから十日ぐらいたった頃、昼休みに、山本さんに話があると呼び止められた。

これってもしかして告白……？

…そんなわけはなく、やはり青島あかりのことだった。

「青島さんは今のままじゃ孤立する一方だと思つた。それで、彼女に武田君からみんなに心を開くように、それとなく言って見て欲しいの。」

山本さん、それは僕には少し荷が重い気が…。

「僕の話だって聞いてくれるかどうか…。」

愛美の時の二の舞になるかも知れないし…。

「多分、大丈夫だよ。青島さんは、武田君には少し心を開いているから。」

山本さんに笑顔でお願いされると…、断れないよ。

「やるだけやってみるけど…。」

僕はどうして頼みごとを断れないのだろうか？

「じゃあ、お願いね！」

はあー、山本さんの笑顔は何て可愛いんだ…。

イヤイヤ、そうじゃない。

メントくせい…。

その日の午後は、どうやって青島さんに話そうか考えていたが、放課後に思い切って声を掛けた。

「…あのさあ、青島さん！」

「何？」

返事に少しトゲがあったが、話は聞いてくれるようだ。

「前の学校で、仲がいい子とかいたの？」

ちよつと遠回し過ぎたかな？

「…？少しはいたけど、仲良くなる前に転校したから。」

彼女は、質問の意図を図りかねているようだ。

「和志、帰ろうよ！」

「ごめん、愛美。ちよつと用事あるから先に帰ってて！」

愛美に呼び掛けられたが、今日は青島さんと話をしなければいけないと思った。

「それで話の続きだけど、青島さんは、この学校で友達を作らないの？」

「…あかり…。」

「…？」

「…だから、私の名前。」

「…青島さん？」

「だから、あ・か・り。」

そう呼べってことか？

「あかりさん？」

「…『さん』？」

「…あかり…ちゃん。」

「まあ、それでいいか。」

何で呼び方にこだわっているんだ？

少し顔が紅い彼女。

もしかして、怒らせてしまったか…。

「ねえ、話…長くなる？私、このあと用事があるんだけど。」

「あー、ごめん。…帰りながらもいいかな？」

機会を改めても良かったが、先に伸ばしちゃいけない気がした。

「…。」

無言でうなずく彼女。

一緒に帰ることにしたはいいが、僕は困ってしまった。

僕の質問に青島さんは答えてくれないし、どうやって続きを切り出すか悩んでいた。

「…ねえ、あんたって、高橋さんと付き合ってるの？」

突然、彼女から話し掛けられ、ビクツとする僕。

「付き合っていないけど…何で？」

「親しげに下の名前で呼んだりとか…、一緒に来たり、帰ったりしてるから…。」

「アイツとは小学校からの腐れ縁。そういう色恋沙汰にはならない

よ。多分、アイツもそう思ってると思うよ。」

「向こうは違うかも知れないけどね…。」

「…?」

彼女の言葉の意味が理解出来ず、何にこだわっているのかも分からなかった。

その後はまた無言が続く。

「…カズ君…って、動物園に行ったことある?」

「!?!?」

電車を降り、改札を抜けた時、彼女が再び口を開く。

今までの話の流れと、動物園はどんな関係があるんだ?

それより今、『カズ君』と呼ばれなかったか?

「明日、学校休みだから、動物園に連れてってよ!朝十時、駅の改札前に集合!じゃあね!」

彼女は、そう言い残して走り去ってしまった。

断る余地がなかった…。

女の子とデートすることになったのに、混乱していた僕は全く喜べなかった。

事態は更に、メンドくさいことになった…。

少年Kと私（愛美編）（前書き）

今回は愛美目線の話です。



少年Kと私（愛美編）

「教科書、まだもらってないんだよね？見せてあげる。」

そう言って男の子は、教科書を私の方に置き直す。

「あっ、ありがとう！」

お礼を言う私に、ニッコリと微笑む男の子。

私はその一瞬で恋におちた。

隣の席の優しい男の子に、私は恋をした。

小学校三年生の時に転校して来た私と、少年Kの出会い。

私の初恋の人、武田和志との出会い。

それから彼とは休み時間になると、よく話すようになる。

家が近所ということも分かり、一緒に帰ることもあった。

一緒に遊びに行くこともあった。

勿論、二人だけではないが…。

私と彼との仲を面白がって、囃し立てる子もいたが、彼は全く気にしていなかった。

私は自分の気持ちを彼に悟られないように、必死に隠した。

幸い、鈍感な彼には気付かれることはなかったが、必要以上に仲良くなり過ぎてしまった。

どうやら私は、彼の恋愛対象から外れてしまったようだ…。

傍にいればいつかは振り向いてくれるかも、という淡い期待を持って同じ高校を選んだ。

ところが、和志は高校入学早々、同じクラスの山本純子ちゃんに恋をしてしまう。

アイツは、その恋心は誰にも気付かれていないと思っているようだが、私にはバレバレだ。

自分が好きな相手が、誰のことが好きなのか、そんなことは本人に聞かなくても分かる。

だっていつも彼を見てるから…。

どうせ純子ちゃんが、みんなに同じように向ける優しい笑顔に、アイツが勘違いしただけ。

中学生の時も、似たようなことがあったけど、彼はその子に告白したりはしなかった。

だから、今回も同じだと思った私は、特に焦ってはいなかった。

和志の良さが分かるのは、私だけという自信もあったから…。

あの時まででは…。

そして二学期になり青島あかりが転校して来る。

あの子は一体、何なの？

せっかく仲良くしようと思った私を拒絶しただけでなく、和志にちよっかい出したりして！

和志も彼女の肩を持ったりして、まんざらでもないようだし。

今日だって、私の誘いを断って二人で帰ってるし…。

純子ちゃんの時とは違い、私はかなり焦った。

和志が青島あかりに取られる気がして…。

## 少女Aと初デート

「カズ君は私のこと、好き？」

少し顔を赤らめて問いかける幼い少女。

「うん、大好き！」

恥ずかしげもなく答える幼い僕。

青島あかりとデート？することになってしまった日の夢。

そうだ！

昨日、彼女も僕に、『カズ君』と呼び掛けてきたんだ。

夢の中の少女と、青島あかりは何か関係があるのか？

…そんなはずはないか、と思い苦笑いする。

聞き間違いか、僕の勘違いだよ…、きっと。

その日、僕は憂鬱な気分のまま駅に向かう。

何でこんなことになっているんだ？

同じ学校の奴らに見つかったら、何を言われるか分かったもんじゃ  
ない！

それに、山本さんに会ったりでもしたら、また変な誤解をされかね  
ない。

駅に着くと、彼女はすぐに見つかった。

私服姿の彼女は、同年代の女の子に比べてずっと大人っぽく、可愛  
く見えたから…。

ん？あれ？彼女の隣に誰がいるぞ？

彼女は僕を見つけると、笑顔で小さく手を振る。

何だよ、ちゃんと笑えるじゃん！

彼女の隣にいるのは、小さな少女だった。

彼女の手をしっかりと握り、近づく僕に微笑む少女。

なんだ…、二人きりじゃないのか…。

ホツとしたような、残念なような複雑な気持ち…。

「ごめん、待たせちゃった？」

「大丈夫、今来たところだから。」

待ち合わせていたカップルがする型通りの挨拶をしながら、彼女の横にいる少女が気になる。

この顔、どこかで見た気が…。

こんなに小さい友達なんかいるわけもないから、間違いなく初めて会ったはずなんだが…。

「あつ、この子、私の妹。ほら、ちゃんと挨拶して。」

僕の視線に気付いた彼女が、隣の少女を紹介する。

「青島ほのかです。五歳です。今日は動物園に連れてってくれてありがとう！」

しっかりした子だ。

彼女の妹なら納得だ。

姉妹だけあってよく似てる。

それで見ることがある気がするのだろう。

「この子が、動物園に行きたいって言ったんだけど、ここの近くの動物園の場所がよく分からなくて。小さい頃、行った記憶があるけど、行き方なんて覚えていないから。」

妹が一緒だからか、いつもの刺々しさもなく話す彼女。

ん？小さい頃、行ったって？

彼女は小さい頃、この近所に住んでいたことがあるのか？

動物園へは、電車で二駅先、そこから歩いて十分ぐらいの距離。

ほのかちゃん、電車の中ではしゃいでいた。

それを注意する彼女も、楽しそうだった。

それにしても、今日の彼女はよく笑う。

今まで、こんな笑顔、一度も見たことないぞ。

「和志お兄ちゃんも、手をつなごうよ！」

彼女、ほのかちゃん、僕、という並びで、手をつないで歩く三人。

はたから見たら、親子に見えたりして…。



…親子にしては僕達は若すぎるな…。

せいぜい、仲の良い兄妹というところだな…。

そんなバカなことを考えてたら、恥ずかしくなり、顔が紅くなった気がした。

チラッと彼女を見ると、目が合ってしまった慌ててそらしてしまう。

「…やっぱり…、覚えてないんだね…。」

彼女が悲しそうに呟く。

「えっ！何を？」

慌てて聞き返すも、彼女は何も答えてくれなかった。

園内を歩き回ると、疲れもするし、腹も減る。

ちよつと売店も見つけた。

「腹減ったから休憩しようよ。売店で何か買ってくる。」

二人に背を向け、食べ物を買うに行こうとすると、

「私、お弁当作ってきたから、一緒に食べようよ!」  
と背中がした。

「えっ!何を?」

思わず聞き返す。

「だから、お弁当!」

「誰が?」

「だから、私を作ってきた!」

「僕の方も?」

「だからそう言ってるでしょ!」

「...。」

失礼ながら、啞然としてしまった。

「何よ、その顔は!」

「あつ、ごめん。ちょっと意外だったから。」

『意外』って何だ!

何を失礼なことを言ってるんだ、僕は!

「失礼な奴！こう見えても料理は得意なんだから。嫌なら食べるな！」

「ごめんなさい。食べます。…じゃあ飲み物買って来るよ。何がいい？奢るよ！」

「烏龍茶。」

と彼女。

「和志お兄ちゃん、私はオレンジジュース！」

「了解！」

何か、ズキンってきた…。

すごくドキドキした…。

その日の帰り、動物園の最寄駅の改札に入る前の出来事。

「ちよつとトイレ寄ってくる。」

電車が来るまで少し時間があつたからトイレに寄つた。

「私も！」

ほのかちゃんもだ。

「じゃあ、そこで待ってるから。」

ここで一旦彼女と別れ、用を足してトイレから出てくると、彼女は二人組の男と話していた。

ん？知り合いか？

イヤ、違う。ナンパだ！

やっぱり、彼女は可愛いから目立つもんなあ…。

…って感心してる場合じゃない！

助けないと！と思い走りだそうとした瞬間だった。

彼女は腕を掴んできた男の腕をとると、いとも簡単に投げ飛ばしてしまった。

彼女が男達に何か言っていると、彼らは逃げるようにどこかへ行ってしまった。

「…っ、強いんだね…。」

驚きを隠せないまま声を掛けると、

「…！見てた…の？…合気道…やってたから…」

彼女は恥ずかしそうに答える。

別に照れることじゃないのに。

駅前で彼女達と別れると、彼女について分かったことを整理する。

彼女には妹がいること。

昔はこの街に住んでいたかも知れないということ。

妹の前ではよく笑うこと。

料理は得意。

合気道をやっけていて、男を簡単に投げ飛ばすことができる。

僕の中では、もう謎の転校生『少女A』ではなくなっていた。

寝る前に、ほのかちゃんと二人きりになった時に、少し話をしたことを思い出す。

「ねえ、和志お兄ちゃんは、あかりちゃんの彼氏なの？」

どこでそういうことを覚えるんだか…。

「違う…と思う。」

何で言い切らないんだ、僕は…。

「そうなの？昨日のあかりちゃん、いつもよりはしゃいでいたし、今日も早起きしてお弁当も作ってたから、一緒に行くのは、あかりちゃんの彼氏だと思ったのに。」

「残念ながら…。」

『残念』てどういうことだよ…。

僕は何をがっかりしているんだ？

その日はなかなか寝付けなかった…。



## 少女Aと幼なじみ

「すぐに見つかるから大丈夫だよ。」

泣きじゃくる少女を励ます幼い僕。

どうやら親達とはぐれ、迷子になっているようだ。

迷子センターらしき所で、少女を励ます僕は、必死に涙を堪えていた。

僕の手は少女の手をしっかりと握っていた…。

青島あかりと動物園へ行った日の夢は、幼い少女と幼い僕が迷子になっていた。

朝、目覚めると、小さい頃、両親に連れられて動物園に行った時、迷子になったことを思い出す。

でもその時は一人きりだったはずなんだが…。

週が明けて、月曜日。



たまたま早く起きた僕は、いつもより早めに家を出た。

いつもの電車より、一本早い電車に乗れそうだった。

駅のホームに着くと、青島あかりを見つける。

土曜日のことを思い出し、何だか気恥ずかしかった僕は、声を掛けようかどうか迷っていた。

「おはよう。…何で無視してんのよ!」

挙動不審だったのか、彼女が気付いて声を掛けてきた。

「お、おはよう。何か、声を掛けちゃまずい気がして…。」

思わず本音が出たが、

「はあ?何それ?あんたって、やっぱり変な奴だね。」

そう言っただけで楽しそうに笑う彼女。

僕の言葉の真意は、彼女には伝わらなかったようでホッとした。

そこから教室まで、僕と彼女は色々、話をした。

その中で彼女について、いくつか分かったことがある。

彼女の前の高校は、女子高だったこと。

両親は離婚してしまい、今は母親と妹と三人で暮らしていること。

朝と夕方は、妹を保育園に送り迎えしていること。

だからいつも、この時間の電車で学校へ行き、終わったらそのまま保育園へ妹を迎えに行っていること。

この日の朝も、彼女はよく笑った。

やっぱり、笑顔の彼女は可愛い。

土曜日からこの日の朝までに、彼女について沢山のことが分かり、嬉しい。

でも、そんなことを思った僕の頭は少し混乱した…。

深く考えずに二人で教室に入ると、少ないながらもすでに登校して来ていたクラスメイトの視線を集めてしまう。

そりゃそうだ…。

誰にも心を開いていない謎の転校生が、男と一緒に登校して来たのだから。

席に着くと山本さんが声を掛けてきた。

「おはよう！さすが武田君だね！」

意味深に笑う山本さん。

「えっ、何が？」

山本さんはまた誤解してないか？

「まあ、色々と、ね。フッフ！」

山本さんは、チラツと青島さんの方を見た後、僕に笑顔を向けてどこかへ行ってしまった。

「顔がニヤけてるよ、ムツツリ男！死ぬ、バカ！」

「…！」

『死ぬ』ってそれはきつ過ぎないか、あかりちゃん…。

さっきまでの笑顔が消え、僕に冷たい視線を投げ掛ける彼女。

彼女は一体、何を怒っているんだ？

その日以来、僕は一本早い電車で登校するようになった。

彼女ともっと話がしたかったから。

彼女のことをもっと知りたかったから。

「ねえ、カズ君。」

彼女は僕を、『カズ君』と呼ぶ。

『武田君』とか、『和志君』は呼びにくいからという理由。

最初は何だかムズ痒かったが、それもすぐに慣れた。

夢の中の小さな少女も、『カズ君』と呼んでいたし。

「何だよ、あかりちゃん。」

僕は彼女をこう呼ぶ。

これは…まだ慣れていない。

「いつになったら『あかり』って呼ぶのよ!」

彼女は『あかりちゃん』でも不満らしい。

「呼び捨てにするのは、何かおかしい気がするし…。」

山本さんも『あかりちゃん』って呼ぶし、僕達は付き合ってるわけじゃないから…。」

「でも、高橋さんのことは『愛美』って呼んでるでしょ。…彼女でもないのに…。」

「…そうだけとさあ…。」

どうして彼女は呼び方にこだわるのだろうか？

僕とあかりが初めて一緒に登校した日以来、彼女は少しずつ周りに心を開くようになってきた。

無愛想だと思っていたのは、彼女が人見知りなだけだということに気付く。

最初の頃、無表情だったのは、転校してきたばかりの緊張感からだ、と彼女は言う。

この頃は、山本さんや僕とは普通に話すし、その他のクラスメイトとも少しずつ話をするし、一緒に笑ったりもする。

一部の女子を除いて…。

「カズ君は、純子ちゃんと高橋さんのどっちが好きなの？」

ある日の電車の中で、彼女に突然、聞かれた。

「ゴホッ、ゲホッ、…！」

思わずむせてしまった。

彼女の質問はいつも突然だ。

「動揺し過ぎ！」

そう言っつて、ケラケラ笑うあかり。

「だから前も言ったように、愛美は単なる幼なじみ！」

少しムキになって言い返す僕。

「じゃあ、やっぱり純子ちゃんが好きなんだね…。」

「…！」

何でそうなる！

どうしてバレてるんだ！

「…好きというか…、ただ懂れてるだけというか…」

歯切れの悪い返事をする僕だが、正直、よく分からない。

最近、山本さんの笑顔を見てもドキドキしなくなったから。

嫌いになったわけじゃないし、前よりも仲良くなれた…けど。

最近、あかりの笑顔や仕草の方に、ドキツとすることがあるよう  
な…、ないような…。

その日の昼休み、パンを買って教室に戻って来た僕は、女子の一団  
とすれ違う。

女子のリーダー格の河合沙織と、その取り巻き二人。

愛美もいたが、彼女達は僕に気付かなかった。

一番後ろから、あかりもそれに続く。

あかりは僕に気付いた。

僕と目があつたその顔は、いつか見た無表情の顔だった。

「どこにする？…屋上でいいよね。」

後ろから河合沙織の声が聞こえた。

ん？どういうことだ？

河合一派とあかりは、口もきかないし、視線も合わせない犬猿の仲ではなかったか？

胸騒ぎがしたが、彼女達もようやく仲良くなろうと動き出したのだらうと思った。

イヤ、そう思い込もうとした…。

席に戻り隣に目をやると、あかりの弁当箱は手付かずのまま置いてあった。

…弁当も持たず何をしに行くんだ…？

「…まさか…。」

イヤイヤ、大丈夫。そんなはずはない…。

「…でも…。」

だから彼女達は、友達になるんだって！

「…だーもう！」

僕はパンを食べずに教室を飛び出した。



確か、屋上って言ってたな。

僕は無意識に屋上に向かって走り出した。

「愛美がアイツのことを好きなの。それなのに横からちよっかい出すなよ。」

河合の声が聞こえた。

「でも付き合っていないんでしょ？」

あかりの声もした。

「何よ、開き直る気？」

再び河合の声。

「オイ！こんな所で何してるんだ？」

努めて冷静な声で彼女達に声を掛けたつもり。

でも、少しだけ怒気が混じったかも。

「…！な、何も…。ただ、友達になりたいなあって話してただけ…。」

「  
馬鹿馬鹿しい河合の言い訳に苦笑しながら、

「へーえ。」

冷たい視線と返事を返す僕。

「い、行く…！」

そそくさと逃げ出し始める河合達。

「友達にはなれたの？」

意地悪く聞いてみた。

「…。」

僕の質問には答えず、この場を離れようとする彼女達。

「オイ、愛美！お前ってこういうことする奴だっけ？」

最後に愛美に問いかけてみた。

「…！」

愛美は一瞬ビクツとしたが、そのまま行ってしまった。

「何しに来たの？」

さっきの表情のない顔ではなく、不思議そうな顔をするあかり。

それはこっちの台詞だ！

「えーと、天気もいいから屋上でご飯でも食べようか…と。」

こうなった時の言い訳を考えておくべきだった。

「カズ君、手ぶらだけど？」

クスクス笑うあかり。

しまった！

「ホ、ホントだ…。バカだな…僕。」

嫌な汗が出てくる。

「…？もしかして、彼女達に私が何かされるかも！と思って、様子を見に来た…とか？」

意地の悪そうな顔を見せるあかり。

「…そういうわけじゃ…。」

ズバリと言い当てられて、言葉につまる僕。

「心配しなくても、私、意外と強いから大丈夫なのに。」

「そういう問題じゃないだろ！」

心配して損したと思い、腹が立った。

「でも、……がとつ。」

「えっ？何？」

「何でもない。」

彼女は何事か呟いたが、僕には聞こえなかった。

この時、僕は別のことを考えていた。

愛美が好きな人を、あかりも好きかも知れない…。

河合とあかりの会話が、頭の中をぐるぐる回っていた。

あかりの好きな人って誰だ？

そう考えると、胸がチクチク痛んだ…。

「あかり…は好きな奴、…いるのか…？」

言葉に出してしまった。

「あつ、今、『あかり』って言った！」

嬉しそうな彼女。

しかし、僕の質問には答えてくれなかった…。

少年Kと少女A（愛美編その2）（前書き）

今回も、愛美目線の話です。

少年Kと少女A（愛美編その2）

最悪だ…。

どうしよう…。

冷たい視線だった…。

嫌われちゃったかも…。

二度と私に笑い掛けてくれないかも…。

ああいうことは、アイツが一番嫌いなこと…。

小学生の頃、転校して来た私が、いじめられそうになったらアイツが助けてくれた。

いじめっ子に飛び掛かって行った。

喧嘩が弱いくせに…。

その日の朝、いつもの電車で和志はいなかった。

風邪でも引いたか、アイツ？

水野君に聞いても分かるわけないしなあ。

そんなことを考えながら教室に入ると、和志はもう来ていた。

風邪じゃなかったんだね。

ホツとしたと同時に、ちよつとした違和感を感じる。

「おはよー、沙織ちゃん。」

仲の良い沙織ちゃんに声を掛ける。

「おはよー、愛美。そうそう、愛美に聞きたいことがあるんだけど？」

ん？

「…何？」

沙織ちゃんは、少し険しい顔していた。

「愛美って、武田と付き合ってるんだよね？」

「…！っ、っ、付き合ってるよ、まだ！」

「ん？『まだ』ということは、武田が好きってことでもいいのかな？」

しまった！



テンパって余計なことを言っちゃった！

一瞬、意地悪そうな顔をした沙織ちゃんは、すぐに真顔に戻ると、

「今日、武田の奴、青島と一緒に来たんだよね。」

「えっ…！」

絶句したまま、和志の方をもう一度見ると、先ほど感じた違和感に気付く。

和志の周りには、人が集まり、笑いながら話をしている。

それはいつもの光景。

アイツは、温厚で明るく、面倒見が良いから、周りに自然と人が集まる。

違和感の原因は、その輪の中に青島あかりが加わっていることだ。

しかも、和志に笑い掛けている…。

どういじりごと？

その日から和志は、今までより一本早い電車で学校へ行っているようだった。

「ちょっとー、愛美！このままでいいの？武田の奴、青島に取られちゃうよ。」

「…。」

いいわけないじゃん！

でもどうしたらいいの？

私達、付き合ってるわけじゃないし…。

今、和志に告ったところで、玉砕するだけだし…。

そうしたら、気まずくなって、傍にいたことすら出来なくなるし…。

もう！青島あかりの所為で、私の計画や苦勞が水の泡になるじゃない！

「青島に、私がガツンと言ってあげようか？」

青島あかりが気に入らない沙織ちゃんは、少し過激なことを言い出した。

「…でも…。」

そんなことして、和志の耳に入ったりでもしたら…。

「大丈夫だよ！ちょっと話をするだけだから。」

「…うん…。」

私も青島さんが気に入らないのは事実だから、思わずうなずいてしまった。

その日の昼休みに入ってすぐ、

「愛美、行くよ！」

沙織ちゃんに手を引かれる。

「行ってくて、どこに？」

「決まってるじゃん！青島のところ。」

「えっ、ちょ…。」

ちょっと待って！

私の制止は届かなかった。

「ねえ、青島さん！話があるんだけど。ちょっと付き合ってよ。」

沙織ちゃんは少し喧嘩腰だ。

「…?」

青島さんは、冷たい目で私をチラッと見た。

「ここじゃ話にくいから一緒に来てよ。」

沙織ちゃんに従い、おとなしくついて来る青島さん。

私達はそのまま屋上へ向かった。

「あんだ最近、調子に乗ってない?」

話をするだけだと言ったのに沙織ちゃんは喧嘩腰だ。

「どの辺が?」

冷たく言い放つ青島さん。

その鋭い視線は、沙織ちゃんではなく、私を見ていた。

私は思わず視線をそらす。

「山本と武田を味方に付けてるからって、いい気になるってこと。」

「私が頼んだわけじゃないんだけど？」

「何でそういう言い方するの？そういうところが気に入らないんだけど。」

まるで小学生の喧嘩だよ、沙織ちゃん。

「はあ…。」

ため息をついた青島さんは、少しあきれ顔。

「それに、色々面倒見てくれるのをいいことに、武田に色目使ってたさあ。」

「プツ、あんたもアイツが好きなの？」

青島さんは少し吹き出しながら、さらっとすげいことを言ってきた。

今、『あんたも』って言った？

それってやっぱり…？

「ば、バカなこと言わないでよ！私じゃないくて、愛美がアイツのことが好きなの。それなのに横からちよっかい出したりするなよ。」

「でも付き合っていないんでしょ？」

「何よ、開き直る気？」

「オイ、こんな所で何をしてるんだ。」

和志の声がして、慌てて振り返る。

最悪の事態になった。

青島さんは和志が来ると、先ほどまでの冷たい表情から、柔らかい表情に変わった。

多分、私が和志に声を掛けられた時と同じ顔…。

好きな人に会えた優しい顔…。

ああ、青島さんもやっぱり和志が好きなんだ…。

その顔で確信した。

「オイ、愛美！お前ってこいついうことする奴だっけ？」

和志の最後の言葉が、頭から離れない。

このままじゃ、和志とは友達ですらいられなくなる…。

明日、青島さんに謝ろう…。

それ以外に私ができることは多分ない。

次の日、私はいつもより早く学校へ行った。

和志達よりも早く。

和志のことも気になるが、今は青島さんに謝らないと。

教室で青島さんを待っていると、パラパラとクラスメイト達も教室に入ってきて来る。

「おはよう、高橋さん。今日は早いね。」

山本さんが私に声を掛けてきた。

「おはよう。ちょっと…、用事があった…」

私は思い詰めた顔をしていたかも知れない。

山本さんが私の顔を見て、心配そうな顔をしたから…。

「あっ、おはよう、あかりちゃん！武田君も。」

山本さんの声で、青島さん達が来たことに気付く。

私は勇気を振り絞る…。

「あの…、青島さん。話があるんだけど、いいかな？」

私を見た青島さんは…、穏やかな顔だった。

和志の顔は怖くて見れない。

「じゃあ、他行こっか。」

「オイ、大丈夫かよ。」

和志が心配そうに青島さんに声を掛ける。

「大丈夫だよ、今日は。…でしょ？高橋さん！」

「うん…。」

優しく微笑んでくれた彼女に、私はうなずくことしか出来なかった。



「それで話って何？」

誰もいない所で話を切り出す青島さん。

「昨日はごめんなさい。私、青島さんと話が出たかっただけなんだけど、あんなことになっちゃって…。」

「もういいよ。高橋さんにも色々事情があったらどうし。」

「…ありがとう。」

「…私も高橋さんに謝ってなかったから、ずっと話が出なかったんだ。」

「…？謝るって、何を？」

「転校してきたばかりの頃、高橋さんに酷い態度を取っちゃったから。…あの時はごめんね。」

「ああ、あの時の…。青島さん、転校してきたばかりで大変だったのに、色々無神経なこと言っちゃった私が悪いよ。」

「私、あの時…、高橋さんはカズ君と付き合ってると思ってたから…。」

「えっ？」

「カズ君は…、私の初恋の人なんだ…、多分…。」

「えー！」

「私ね、昔、カズ君の近所に住んでたことがあって…。小さい頃、いつも一緒に遊んでいたの。その後、私が引越しちゃってそれっきりだったんだけど…」

「そうだったの！」

「転校して来た日、『あつ、カズ君だ！』と思ってびっくりしたし、嬉しかったし、昔を思い出したりして…。でもその日、当たり前のように、カズ君と一緒に帰る高橋さんに嫉妬したの。」

「…。」

「私は、カズ君の名前とか、住んでる所とか、顔の雰囲気とかで、あの時の男の子で間違いない…!と思ってるんだけど…。でも彼は…、昔のことはすっかり忘れてるみたいで…」

「そうか…。幼なじみか…」

「ううん、違う。幼なじみは高橋さんの方。私は後から現れた邪魔な女…。ごめんね…」

「どうして謝るの？それは青島さんの所為じゃないよ。」

「カズ君の態度を見ると、私の勘違いかもと思うこともあるんだけど…。でも昔のこと抜きで、一緒にいるうちにどんどん好きになつてきちゃって…。高橋さんを怒らせちゃった。」

「多分、和志は青島さんの初恋の男の子で間違いないと思う…。だ

って、アイツのことを好きになる人が、初恋の人を見間違えるはずがないもん。」

「そう…なのかな。」

「…ねえ、青島さん。」

「…何？」

「私達って、恋のライバルってことに…なるよね？」

「…うん。」

「…でもその前に…、青島さんと友達でいたいんだけど…、私。」

「私も…かな。」

「…何か変な会話だね。…あかり…ちゃん。」

「『あかり』でいいよ、愛美。」

教室に戻ると、和志は心配そうな顔で私達を見る。

「大丈夫だった？」

「大丈夫って言ったでしょ。」

二人はそんな会話をしていた、多分…。

きつと、和志はあかりのことが好き…。

いつも一緒にいたから分かっちゃうんだよね…。

これは彼女には言わなかった。

やっぱり、ちょっと悔しかったから…。

その日は、家に帰るまで涙を堪えていた。

私の初恋と、長い間の片想いは、もう実ることはない…、きつと…。

## 少女Aの家

あかりとほのかちゃんが、公園で楽しそうに遊んでいる。

僕はそんな二人を眺めている。

その日は、青島姉妹と遊んでいる夢を見た。

あかりは好きな人がいるかも知れないと思ったその日。

ショックを受けている僕に混乱したその日。

それ以来、幼い頃の僕と少女の夢は見なくなった。

例の少女が、一体誰なのか思い出せない僕は、大人の記憶に頼ることにした。

「ねえ、母さん。僕が子供の頃、一緒に遊んでた子って、何て言う名前だった？」

母親にカマをかけてみる。

「…？ああ、松田さんのところの女の子？」

やっぱり、あの少女は実在しているのか？

「そう！名前何だったかな？」

名前が分かれば、色々思い出すかも知れない。

「えーと、…アケミちゃんだったかな？…アカリちゃんだったかな？」

ちよつとー、そこが一番大事なんだよ！

『アカリ』と言う名前が出てきたことに、ドキッとした。

その子の名字は重要ではない。

名字が変わっているかも知れないから。

母親の曖昧な記憶が腹立たしかった。

二学期の中間テストが近付いてきていたある日、僕は寝坊をした。

いつもあかりと一緒に乗る電車に間に合わないと思った僕は、彼女にメールを送りながら慌てて家を出る。

送信『ごめん！寝坊した！先に行つてて！』

返信『待つてるから早くおいで！』

先に行つてくれていいのに…、と思いながらも嬉しかった。

ヤバイ、また勘違いしてしまいそうだ…。

駅のホームに着き、あかりを見付けると、顔がニヤけてしまった。

しかし、彼女の隣に愛美がいるのを見付け、慌てて顔を戻す。

笑いながら話している二人は、険悪な関係だったはずなのに、最近  
は仲が良い。

メンドクさいことにならなければ、別にいいんだけど。

「おはよう。」

二人に声を掛ける僕。

「おはよう、カズ君！」

「おはよう、和志！寝坊したんだって。」

「先に行つてて良かったのに。」

「先に行ってもつままないから。」

僕と一緒にいるのは楽しいってことか！

ニヤけそうになる顔を必死に隠す…、二人に気付かれないように。

「もうすぐテストだよな？二人は成績どうなの？」

あかりの質問に、

「私はそこそこいいけど、和志がねえ…。」

何で僕の成績までお前が答えるんだ、愛美！

「はあ…、テストなんて…。」

「『メンドくさい！でしょ？』」

「…！」

啞然とする僕をよそに、ケラケラ笑う二人。

「『メンドくさい』はカズ君の口癖。」

「あかりと、和志のその口癖について話してたところだったの。」

なんだよ、二人して！



その日の放課後、

「そろそろテスト勉強しないなあ…。」

ポツリと僕が呟く。

「一緒に…勉強しよう…か？」

「えっ！」

あかりの発言にびっくりする僕。

「妹を迎えに行かなくちゃいけないから、私家で勉強しよう…よ。」

いつも、あかりの言葉にはドキドキさせられる…。

「でも…。」

女の子の家に行くのはまずいだろ？

僕は一応、男だし、彼氏じゃないし…。

「あー、またエロいこと考えたでしょ？」

「あつ、えつ、か、考えてないって!」

勿論、嘘です…。

僕も健全な高校生の男なんです…。

それに『また』とは何だ!失礼だぞ、あかり。

「お母さんはいないけど、妹がいるし。それに、私、意外と強いから大丈夫だよ。」

そう言つて微笑むあかり。

『大丈夫』つて何がだよ!

「そ、そうだよね…。アハハ…。」

苦笑いを浮かべる僕は、ホツとしたような、ガツカリしたような…。

結局、あかりの家で勉強することになり、駅からの道を二人で歩く。

あかりは自転車を押しながら。

僕の鞆は、あかりの鞆と一緒に、自転車のカゴの中にある。

並んで歩く二人は、恋人同士に見えるのだろうか？

僕は、あかりへの恋心を否定出来ないところまで来てしまった…。

僕は、この上なく緊張しつつ、少し楽しみだった。

だって、女の子の家に行くなんて初めてのことから…。

いや、初めてじゃないな。

愛美の家には行ったことがある。

でも、もっと小さい頃のことだから…。

緊張で口数が少なくなった僕に気付いたあかりは、

「…？もしかして緊張してるの？」

とズバリ聞いてくる。

「そりゃあ…、少しは…。」

全く、僕は情けない奴だ…。

「ちょっと意外かも。カズ君でいつも飄々としてるから、緊張することはあんまりないと思ってた。」

僕はごく普通の高校生男子なんです…。

「あかりちゃん、今日は遅かったね。あつ、和志お兄ちゃんだ！」  
保育園に着くと、ほのかちゃんが僕達を見て駆け寄って来る。

「ねえ、和志お兄ちゃん。今日は、私と遊んでくれるの？」

ニコニコしながら話し掛けてくるほのかちゃんを見ると、やっぱりその顔を、昔、見たことがあるような気がする。

今より子供だった頃に…。

「今日、お姉ちゃん達は勉強するから、ほのかはおとなしくしててね。」

妹に話し掛ける、『優しいお姉さん』の彼女を見ると、自然に笑みがこぼれてくる。

「なーんだ、つまんない。」

どうやら僕は、ほのかちゃんには気に入られたようだ。

「私の部屋は、絶対入っちゃダメ。それ以外はいいから、適当にくつろいでて。」

とりあえず、居間のテーブルに勉強道具を広げてみる。

…緊張は解けない…。

こんな状態で、集中出来るのか？

「カズ君は何の勉強するの？」

私服に着替えてきたあかりは可愛かった。

この前のお出掛け用の服も可愛かったが、普段着も負けず劣らず…。

今回は、恋愛フィルターがかかっている所為かも知れないが…。

「…とりあえず、数学をやるつか…と。一番苦手なんだよ。」

「分からないところがあつたら、教えてあげられるかも知れないから、遠慮なく聞いてね。」

そう言えば、あかりは頭がいいんだった。

煩惱を懸命に振り払い、勉強に集中した。

しばらく数式と格闘した後、ふと周りを見ると、ほのかちゃんが一人で遊んでいるのが見えた。

何気なくほのかちゃんの顔を見てみると、

「……………！あーっ！」

思わず声を上げてしまった。

「…！」

「…何！」

二人の視線を集めてしまう。

「あっ、ごめん。なんでもない。」

あかりは不思議そうな顔で、視線を元に戻す。

ほのかちゃんも。

僕は、ある事実気付いた。

ほのかちゃんが、僕の夢に出てくる幼い少女に似ているのだ。

僕が昔、一緒に遊んでいたと思われる少女に…。

例の少女より、ほのかちゃんの方が大きいけど、間違いなく似ている。

ほのかちゃんをあかりに似ている…、ということとは…。

夢の中の少女はあかりではないのか…？

その日の夜、僕はなかなか寝付くことが出来なかった。

好きな女の子の家に行ったという事実と、夢に出てくる初恋の少女があかりではないかという推測で…。

あかりのお母さんに会えば、もう少しはつきりするのではないかとも思ったが、あまり遅くまで彼女の家にいるのもどうかと思った。

それに、会ったら会ったで色々説明するのもメンドクさい。

うちの母親にあかりのことを聞いてみようとも思ったが、まだ僕の想像に過ぎないから違ってたらちよつと恥ずかしい。

それに、色々詮索されるのもメンドクさい。

やっぱり、本人に聞くしかないか…。

でも、どうやって…？

それからテストの日まで、あかりの家での勉強会は何度か開かれた。さすがに、二度、三度と彼女の家に行くと緊張もしなくなってくる。

その日もいつものように、ほのかちゃんを迎えに行く途中だった。

「ねえ、私達って、…友達…なのかな？」

「えっ…、多分…。」

あかりの質問の意図がよく分からず、真意を読み取ろうと彼女の顔を見る。

うーん、…分かりづらい。

「今日、純子ちゃんに、『あかりちゃんと武田君は付き合ってるの？』って聞かれたから、『友達』って答えたんだけど…。」

「間違っていない…、と思うよ。」

僕はそれ以上の関係になりたいけど、今の二人の関係を示す最適な言葉は『友達』。



「そう…だよね。」

あかりには、他に好きな人がいるかも知れない…が、それらしき人物は見当たらない。

もしかして僕かも…、という妄想はもう飽きた…。

「…テストが終わったら、また遊びに行こう…よ。」

しばしの沈黙の後、あかりが再び口を開く。

「いいよ、勿論！ほのかちゃんと三人でだろ？どこに行こうか？」

「……………って意味だったんだけどなあ…。」

「えっ、何？」

「ううん、いいの。こっちの話。私は遊園地がいい…かな。」

「よし、OK！遊園地なんていつ以来だったかな？」

動物園の時と違い、今回はもの凄く嬉しかった。

だって、好きな女の子とデート出来るんだから。

例え、二人きりじゃないにしても…。

ヤバイ、今夜も眠れないかも！

もう、夢の中の少女が誰なのかは、どうしてもよくなってきた。

僕が好きな子は、あかりなのだから。

## 少女Aの初恋

僕は青島あかりが好きだ。

今までも、好きになった子はいる。

でも、今回は今までの『好き』と違う気がする。

好きだと思っていた山本さんに対する気持ちとは明らかに違う。

僕はあかりの笑顔を、一番近くで見たいし、僕の存在で、彼女を笑顔にしたい。

そんなことを考えながら受けたテストの成績は、前よりも落ちてしまった…。

駅に向かう僕の足取りは軽やかだ。

あかりと遊園地に行く約束をしたこの日。

浮かれた気分を抑えられず、早めに家を出た僕は、約束の時間よりも早く着いてしまった。

待っている間ずっと、あかりのことを考えてしまう。

早く彼女に会いたい…。

笑顔の彼女に…。

周りをキョロキョロ見渡す僕は、挙動不審な奴に見えているかも知れない。

しばらく待っていると、遠くに彼女の姿を見つけ、慌てて視線を戻す。

いかにも、気付いていませんよ、という雰囲気で彼女が声を掛けてくるのを待つ。

何やってんだか、僕は…。

そんな自分に苦笑いする。

「カズ君！ごめん、待った？」

「全然！今来たところ。」

嘘をつく僕。

今日も彼女は可愛かった。

僕が待ち遠しかった笑顔だった。

今日は、彼女とすれ違った後、振り返る男が心なしか多い気がする。

ん？あれ？

「…ほのかちゃんは？」

ここで初めて、彼女が一人であることに気付く。

「あつ、あー…、ほのかは、今日は友達と約束があるんだって…。」

「えっ、…そうなんだ…。」

つてことは、今日は二人きりなのか！

「…何よ！私と二人じゃ不満なの？」

「ち、違うってー！」

いたずらっぽい笑顔を浮かべて、僕をからかう彼女。

今日はいつも以上に可愛い。

「私、小さい頃、この遊園地に来たことあるんだ。」

やっぱり、あかりは昔、この近くに住んでいたのは間違いない。

「僕は中学生の時、愛美達と来たことがあるよ。」

「…ふーん…。」

しまった！

調子に乗って余計なことを言ってしまった！

面白くなさそうな顔をした彼女を見て、失敗したことに気付く。

あかりの前で、他の女の子の話をしてしまった…。

「…あっ！」

「…？」

「小さい頃、この遊園地で…、イヤ、何でもない…。」

「途中で言い掛けてやめないでよ！気になるでしょ。」

「大したことじゃないから…。」

僕はこの時、思い出した。

小さい頃、この遊園地で僕は迷子になったんだ…。

正確に言つと、僕達は…。

一緒に来ていた少女と…。

あかりかも知れない、夢の中の少女と…。

また余計なことを言つて、あかりを怒らせてはいけないと思い、僕はこの話はこれ以上しなかつた。

「…小さい頃、この遊園地で何かあつたの？」

今日もお弁当を作つてきてくれたあかり。

二人でそれを食べながら、僕が言い掛けたことの続きを聞いてくる彼女。

「何でもないつて言つただろ…。」

「だって、気になる…から。」

しつこく聞いてくるあかりに戸惑いながら、

「…えーと、…小さい頃に来た時、ここで迷子になったことを思い

出ただけ…。」

当たり前障りのないように答えた。

「…一人で？」

何でそんなことを聞いてくるんだ？

「…どうだったかな？」

そう答えて、彼女の反応を伺った。

「…。」

彼女は、心なしかガッカリしたように見えた。

僕の気のせいかも知れないが…。

「…あかりって、料理がホント上手なんだな。」

何とか話題を変えようとした。

「…ど、どつしたの急に？」

珍しく動揺する彼女。

「今日のお弁当もおいしかったよ。」

単純に思ったままを答える僕。



「学校にも…、作っていつてあげよう…か？」

「えーっ！」

「…冗談だよ！」

いたずらっぽく微笑むあかりを見て、彼女の方が上手であることを悟った…。

二人でいると、時間はあっという間に過ぎてしまう。

そろそろ帰ろうかと言う僕に、最後に観覧車に乗りたいたいと言う彼女。

僕はドキドキしながら、観覧車に乗った。

「…私が三歳ぐらいの時…。」

観覧車に乗ると、彼女が話し出す。

「…！」

僕はビクツとした。

僕はこの時、今、あかりに告白するチャンスなんじゃないか？と考  
えていたから…。

「初恋の男の子と、ここに来たんだ…。」

「…へ、へーえ…。」

彼女は一体、何を言い出すつもりだ？

「その子のことは凄く好きで、いつも一緒に遊んでいたの。」

「ふ、ふーん…。」

彼女の意図が読めない。

「私は、その子とずっと一緒にいたかったから、『大きくなったら  
私と結婚して』って言ったの…。一緒にいるには結婚すればいいっ  
て、お母さんに聞いたから…。けど…。」

「けど…?」

「その子も『いいよ』って言うてくれたんだけど…。私が引越して  
ちゃって、それっきり…。その子も私のことなんて覚えてないよ…  
ね…。」

彼女は、反応を伺うようにチラッと僕を見た。

僕は思い切って、今までずっと気になっていたことを彼女に聞いて  
みた。



「…。」

あかりが好きだと伝えたかったが、それ以上話すことが出来ず、僕も黙ってしまった。

そんな自分が情けなくて、自己嫌悪に陥った。

観覧車を降りた僕達は、少し空気が重かった。

何とか空気を変えようと努力したが、少し空回っていたかも知れない。

でも、彼女はそんな僕に微笑んでくれた。

駅から彼女の家までの途中に公園がある。

そこで勝負するしかない！

今、言わなくて一体いつ言うんだ？

彼女は僕のことを悪く思っていないはずだ！

もしダメならダメでいいじゃないか！

彼女を家まで送る途中、ずっとそんなことを考えていた。

そして、なけなしの勇気を振り絞る。

「あのさあ…、ちょっと…その公園で話していかない…？」

「あつ、えつ、う、うん…。」

すでに辺りは薄暗くなり始めていた。

二人分の飲み物を買ひ、一つを彼女に渡しながら、公園のベンチに腰掛ける。

「あのさあ…、僕、好きな子が…いるんだ…。」

酸欠気味で、自分の声じゃないみたいに聞こえる。

「えつ、そ、そうなんだ…。」

勘のいい彼女は、僕が何を言おうとしているのか、気付いたかも知れない。

彼女の顔は、怖くて見ることが出来ない。

「始めは…、その子…、謎が多くて…、何となく気になっていただけなんだけど…。」

「…。」

「だんだん、その子のことが分かる度に、何だか嬉しくなってきたんだ…。」

「…。」

「…そのうち、彼女の笑顔がもっと見たくなってきて…。その子の笑顔を一番近くで見たくなってきた…。」

「…。」

「気が付いたら、もう好きだった…。その子は、僕のことをどう思っているか…、分からないんだけど…。」

「…。」

何か喋ってくれよ！

心が折れそうになるだろ！

「…つまり、…何が言いたいかというと…、……………あかり…が…好きなんだ！僕と付き合って欲しい！」

よし、言えた！と思ってあかりの顔を見ると…、

「…。」

涙が彼女の頬を伝っていた。



こ、これは…、キスしていいってことか???

まだ早いんじゃないのか？

顔を彼女にゆっくり近付けると…、彼女は目を閉じた…。

僕は、彼女に、…キスをした…。

何だか照れくさくて、お互いの顔を見ることが出来ずに、すっかり暗くなった夜道を並んで歩く二人。

一瞬、彼女の手が僕の手に触れる。

もう一度、手が触れた時、彼女の手を掴み、彼女の手を握る。

握り返してきた彼女の手は、少し冷たかった。

彼女の顔を見ると、彼女が微笑む。

僕は、引きつった笑顔を返す。

それを見た彼女は、クスクスと笑い出した。



僕は、こういうことをスマートに出来ないようだ…。

「あーっ、あかりちゃんだ！和志お兄ちゃんもいる！」

「…！」

驚いて振り返る時、思わず彼女の手を離してしまった。

「二人は恋人同士になったの？」

声の主は小さな女の子。

ほのかちゃんだった。

その後ろに大人の女性もいた。

あかりにそっくりな、いたずらっぽい笑みを浮かべているその人は、彼女達の母親であることは一目瞭然。

「あかり、隣にいるカツコイイ男の子は誰かしら？」

笑みを浮かべたその人は、あかりにいたずらっぽく問い掛ける。

「あっ、えーと、…彼氏…？」

そこは疑問系じゃなく、言い切つて欲しかった…。

「は、初めまして…？じゃないかも知れませんが、あかりさんと同級生の武田和志といます。」

僕は見たことがある気がする彼女の母親に、よく分からない挨拶を  
してしまう。

「…？武田和志？」

彼女の母親が顔を曇らせる。

「…！」

何かまずいことを言ったか…？

「…？もしかして…、武田さんとの『カズ君』！」

「はあ…、多分…。」

『多分』ってなんだよ、僕は…。

「ウソー！久し振り！大きくなったね！元気だった？格好よくなっ  
ちゃって！お母さんは元気？」

「ええ、まあ…。」

興奮気味にまくし立てる彼女の母親に、僕は圧倒されてしまった。

「そうだ！夕飯まだでしょ？うちで食べていきなさいよ！お母さん  
には私が言っただけだから！」

「…！でも、悪いですから…。」

「何を遠慮してるのよ！いいから、いいから！」  
断りきれなかった…。

その日の夕食は、苦笑いを浮かべるあかりの横で、おばさんの質問  
攻めにあっけましまい、味なんて分からなかった。

あかりも将来こんな風になるのかな…？

この時は漠然と思った。

自分の家に帰ると、僕の母親は、

「あんたも意外とやるのね。」

ニヤリとしてきた。

「うるさい、黙れ！」

僕は悪態をつくことしか出来なかった…。

僕とあかりが付き合っているという話は、あっという間に広まってしまった。

僕は一言も言った覚えはないんだが…。

「聞いたよー、和志。あかりと付き合うことになったんだって？」

次の日には愛美がもう知っていた。

「な、何でお前がもう知ってるんだよ！」

「だって昨日、あかりに電話で聞いたから。」

「お前、あんまりペラペラ喋るなよ！」

「どうしよっかなあ。あかりには別に止められなかったし。」

ニヤリと笑う愛美。

ホントにコイツは…！

「もしかして、愛美に言っちゃダメだった？」

その日の帰り、あかりが少し顔を曇らせて聞いてきた。

「ダメじゃないけど、アイツお喋りだから、あっという間に広まっちゃうよ。」

「カズ君は内緒にしておきたかったんだね…。」

ガツクリと肩を落とす彼女に僕は慌てた。

「そ、そういうわけじゃないんだよ！初めてのことだから…、ちょっと恥ずかしいって…。」

「…。」

「むしろ、こんな可愛い彼女なら自慢したいって…。」

「…！そんな恥ずかしいこと、面と向かって言わないでよ！」

顔を真っ赤にした彼女は、とても可愛かった。

お世辞でも何でもなく、僕の彼女が一番可愛い！

他の誰よりも！

少女Aのじぶやま(前書き)

今回は、『少女A』こと青島あかりが一人で呟いています。

## 少女Aのつぶやき

彼にはどこか不思議な力がある。

彼に関わった人は、自然と彼に惹かれ、彼の周りに集まってくる、そんな力が…。

心を閉ざしていた私も、気が付いたら、彼を中心に出来る輪の中にいた。

そんな彼に、惹かれていく私がいた。

彼はいつも飄々としている。

感情が表にあまり出ないから、考えていることは分かりづらい。

『メンドくさい』が口癖だが、面倒見は良く頼まれたことを断らない。

しかも行動力はズバ抜けており、彼に頼めば大抵のことは解決してしまう。

私自身も、『彼が解決したことの一つ』なのかも知れない。

そんな彼だからこそ、私は惹かれた。

彼との出会いは、私がまだ三歳ぐらいだった頃。

一人で公園で遊んでいた私に、彼は一緒に遊ぼうと声を掛けてきた。  
なんとなくうなずいた私。

それ以来、彼と毎日一緒に遊んだ。

彼といるのが、凄く楽しくて。

雨の日でも、公園に行こうと駄々をこねたこともある……らしい……。

とにかく彼と一緒にいたかった。

彼とずっと一緒にいる方法を母に聞くと、大きくなったら結婚すればいいと言われた私は、すぐに実行に移す。

「大きくなったら私と結婚してくれる？」

「うん、いいよ。」

と彼は答えてくれた。



そんな私達だったが、私が引越してしまった為、離ればなれになつてしまった。

その後も、彼のことはずっと覚えていたが、少し成長した私は、もう会うことはないだろうということを悟った。

私が少し大きくなると、妹が生まれる。

その頃から、何故か両親の仲がギクシャクし始め、家の中から笑いが消えていった。

原因は、まだ子供だった私には分からない。

私は少しずつ心を閉ざし始めたが、せめて妹の前では明るく振る舞おうと努力し、一生懸命面倒を見た。

幸い、妹は明るく元気に育ってくれたが、私の限界も近付いていく。

父親は外に女を作り、家に寄り付かなくなっていく。

そんな父親を見ていた私は、男の人が信じられなくなり始め、高校は女子高を選んだ。

高校に入学すると、両親の離婚は決定的となり、母は住む所と仕事

を探し始める。

母は、私達が以前住んでいた街に、昔のついで仕事と住居を見つけた。

私には、転校せず、父親と暮らす選択肢もあったが、迷わず母に付いて行くことを決めた。

好きだから母と結婚したはずなのに、他に女を作る父親が理解出来なかったから。

好きなのに、離ればなれになってしまうこともあるのに…。

そして、両親の離婚、引越、転校のストレスで私の心は限界に達し、髪を染めて意気がったり、友人達との連絡を断ったりした。

家族以外の周囲に、心を閉ざした…。

転校先に、今の高校を選んだことに深い意味はない。

新しい街に女子高はなく、遠距離を通学するのは馬鹿らしかったから、その街にある共学の進学校を選んだ。

母の母校ということも決め手になった。

今の街に戻ってきた時、小さい頃、一緒に遊んでいた彼を思い出し

た。

でも、向こうは覚えていないかも知れないし、街で偶然会っても、お互い気付かないだろうと思っていた。

新しい環境で、心機一転頑張ろうという気にはなれず、その年の夏休みは色々な手続きもあり、無意味に過ぎていった。

二学期の始業式は特に感慨もなく迎え、これからの高校生活は憂鬱だった。

…が、しかし…。

転校初日、彼を見つけた。

初恋の彼を…。

彼と目が合った時は驚いた。

彼は、私が想像していた通りの高校生に成長していた。

昔の面影を残し、名前も一緒。

間違いないと思った。

その日、彼が気になった私は、こっそり後をつける。

私と一緒に駅で降りれば、間違いなく、初恋の彼だろうと思った。

しかし、ストーカーまがいの行為をした私は、すぐに後悔する。

彼の隣に、『彼女』らしき存在を見つけってしまったからだ。

その彼女の様子から、彼が好きということが伝わってきたから…。

次の日、声を掛けてきたその彼女に、私は嫉妬から酷い態度をとってしまう。

こともあろうくに、彼の目の前で…。

当然のように私は孤立し、彼にも嫌われたと思っていた。

その頃の私は、それでいいと思っていたし、彼に嫌われたとしても、彼が私のことを覚えていなければ意味がないと思った。

『彼女』もいるようだし…。

しかし、彼は私に声を掛けてくる。

大方、誰かに言われたからだと思った。

どうせ、みんなと仲良くしろと言われると思った。

ところが彼は、前の学校に友達はいたかと聞いてくる。

そんな彼の真意は何なのか気になったが、適当に切り上げようとは思っていた。

それでも彼は、『彼女』からの誘いを断ってまで食い下がってくる。

彼の中に、芯の強さらしきものを感じた。

腫れ物に触るような感じで接してきた彼は、付き合っている女の子の存在は否定したが、私のことを覚えている素振りはない。

思い切って私は、彼との思い出の場所に誘ってみる。

断る余地を与えないように…。

彼とのファーストキスの場所に…。

彼が、何か覚えているかも知れないし、思い出してくれるかも知れないと思ったから…。

結局、彼は何も覚えていなかったし、何も思い出さなかった。

しかし私は、その時、あることに気付く。

家族以外に、最近は見せていなかった笑顔を、彼に見せていたのだ。彼の前では自然に笑うことが出来ていた。

彼の前では心を閉ざした私はいなかった。

気が付くと、彼を中心に出来る輪の中に自分があり、周囲とも自然に打ち解けていった。

この頃、私は彼が好きだということを実覚する。

初恋の彼かどうかは関係なく、目の前にいる彼が好きだということ...。

好きだということを実覚すると、彼が誰が好きかということが気になる。

多分、私ではないと思っていたから...。

私には心当たりが二人いた。

一人目は、私が『彼女』だと勘違いした幼なじみの女の子。

彼は否定するが、その女の子は、間違いなく彼のことが好きだと思っていた。

だから、何かの拍子に彼の気持ちが傾くかも知れないと思い、気が  
気じゃなかった。

私自身が『彼女』でもないのに、知らず知らずの内に彼を独占して  
しまい、その子を怒らせてしまった。

二人目は、クラス委員の女の子。

頭がいいのに、それを鼻に掛けることもなく、誰にでも平等に優し  
い女の子。

可愛くて優しい上に、その子の言葉には説得力があり、正直、かな  
わないと思った。

唯一の救いは、その子の気持ちが彼には向いていないことだけだっ  
た。

それから私は、彼を振り向かせようと、色々なアプローチを仕掛け  
る。

他の子に取られないように…。

ところが彼は、私のアプローチにことごとく気付かない。

周りの空気はしっかり読むくせに、自分自身のことは全てスルーし  
てしまう彼。

好きでもないのに、一緒に登下校したり、家に呼んだりするわけが

ないだろ！と思い腹も立った。

痺れを切らした私は、大きな賭けに出る。

これでダメならもう無理だというほどの覚悟だった。

成功すれば、彼は昔を思い出してくれるかも知れないし、私の気持ちに気付いてくれるかも知れない。

幼い私が、彼にプロポーズした場所…。

子供時代の私達が、結婚の約束をした場所…。

そこに彼と二人きりで行くことにした。

前回は妹を利用したが、今回は自力で何とかしようとした。

その日の彼は、朝からソワソワ落ち着きがなかった。



そんな彼に、私は少し期待をする。

その場所で、彼は何かを思い出したが、私が期待した言葉は出てこない。

ただ、彼の気持ちは私には届いてきた。

おそらく、彼も私のことが好きだということが…。

そうと分かれば焦ることはない。

彼が告白してくれるのを待つだけではなく、私から告白してもいいんだから。

後日、作戦を練り直そうとした。

その場で覚悟を決める勇氣はなかったから…。

まだ私の思い違いの可能性もあったから…。

その日の帰り道、彼は朝より更にソワソワしていた。

もしかして…、という考えが何度も頭をよぎる。

そして…、ついに…。

彼の言葉を聞いている内に、何故だか涙がこぼれそうになった。

必死で堪えていたが、彼に、『好きだ』と言われた時には、もう堪え切れなかった。

いっぱいいっぱい彼の様子は、おかしかったし、たまらなく愛しかったから私は…。

…私達は、恋人同士になることが出来た。

彼の前に、十数年振りに現れた私は、彼の周囲を大きく騒がせてしまった。

彼の幼なじみの女の子には、非常に申し訳なく思った。

彼女には一番に報告し、謝らなければならぬと思った。

彼女は私におめでとうと言ってくれる。

私のことは気にしないでと言ってくれる。

こうなる運命だったんだよと…。

「あなたは運命を信じますか？」

と聞かれたら、

「はい。」

と私は答えるだろう。

私と彼の出会いは、運命としか言い様がないようなものだったから。

どこか一つでも違っていたら、恋人同士になることは出来ていない。

再会することも、会うことすらも…。

私が転校して来なかったら…。

両親が離婚しなかったら…。

あの日、彼が声を掛けてこなかったら…。

あの日、私が公園に行かなかったら…。

私達が生まれなかったら…。

全ては運命の名のもとに、最初から決まっていたことかも知れない。

私達はその都度、選択を間違えることなくたどり着いた。

この先私達は、再び離ればなれになることがあるかも知れない。

でも、少し大人になった私達にとっては、些細なことに違いない。

お互いが愛しいという気持ちさえあれば…。

今、私が言えることは、彼が好きだということ。

どうしようもなく、大好きだということ。

他の誰よりも…。

世界で一番、彼が好き！

## 十年後の少女A（最終話）

「結婚の約束までしたのに、再会した時はすっかり忘れてたのよ。酷い男でしょ？」

「でも、そこが義兄さんらしいけどね。」

平穏な休日の昼下がり、居眠りをしてしまった僕は、妻の話し声で目を覚ます。

もうすぐ、子供が生まれる妻の様子を見に来た義妹と、話をしていく彼女。

どうやら、僕達の出会いについて話しているようだ。

少し気まずい僕は、寝た振りを続けることにした。

彼女は、今でもそのことをネタに、僕を責めるからだ。

「お姉ちゃんは、義兄さんのどこを好きになったの？」

それは、僕も興味がある。

僕が聞いても、いつもはぐらかされてしまっから。

「…小さい頃の話は覚えてないけど…、高校生の時は…、何か変な奴だったのよ。」

変な奴って…。

「何それ！もう少し詳しく教えてよ！」

「えーとね…、いつも『メンドくさい』って言ってるのに、周りから凄く頼りにされてて、頼まれたことに『嫌だ』って言わないのよ。」

「それは確かに、変な奴だ！」

「それなのに、本人は自分のことを普通だと思っていることが、可笑しくて…。それだけが理由じゃないけど、これ以上は、ほのかに秘密。」

肝心なところは、やはり聞けず…。

「何でよー！でも、初恋の人と結婚出来たお姉ちゃんが羨ましい。」

「そうかな…？ほのかの初恋はいつだった？」

「私は五歳の時。」

「相手のことは覚えてるの？」

「覚えてるも何も、相手は義兄さんだから。」

「えっ！」

僕も、声を出しそうになったが、辛うじて抑えることが出来た。

今年、高校生になった義妹は、高校生当時の妻にそっくりだ。

勿論、どうこうするつもりは毛頭ないが。

「義兄さんには内緒だよ。」

「…でも、あそこで寝た振りしている男は、今の話、聞いてたかも知れないよ。」

「…！」

相変わらず勘のいい奴だ！

突然、僕の前に現れた『少女A』は、僕の平穩だった日常を騒がせた。

僕は彼女に惹かれ、恋をした。

そしてあの日、恋人同士になった後は、彼女がいる日常が平穩な日常になった。

三学期になると、隣同士だった席は離れてしまう。

二年生になると、クラスも別れてしまう。

大学も、別々のところに進学する。

でも、僕達はずっと恋人同士だった。

十年以上も、音信不通だったことを考えれば、ほんの些細なことに過ぎなかった。

連絡は取れるし、お互いを愛しいという気持ちがあったから。

幼い頃、偶然出会った僕達は、しばしの別れを経て、高校で再会する。

きっかけはどうであれ、お互いに惹かれ合い、恋人になる。

当たり前のように、一緒にいるようになった僕達は、お互い初めて同士のセックスをした。

大人になった僕達は、当たり前のように結婚し、幼い頃の約束を果たす。

もう少しすれば新しい家族も増え、僕の周りにはまた騒がしくなるだろう。

いつの日か、それも僕達の日常の一部になり、それが平穏な日常になる。

お互い歳を取り、どちらかが人生の最後を迎えることになった時、



隣にすることが出来れば、又は隣にいてくれれば、これに勝る幸せはない。

とある少年と少女は恋をして、恋人同士になり、結婚をする。

そんな何処にでもあるような恋の話。

少女Aと僕の日常には、どんな未来が待っているのだろう。

完

## 十年後の少女A（最終話）（後書き）

最後まで読んでいただき、ありがとうございます。これで本編は完結です。

最終話のあとがきを使って、登場人物について補足説明をしようかと思えます。

興味のない人は読み飛ばしで。

（武田和志）

本編の主人公。

性格については本編で色々説明がありますが、容姿については説明をしていませんでした…。

設定上は、イケメンの部類に入るでしょう。しかも、かなりモテます。

数々のフラグには、ほとんど気付きませんが、肝心な所は逃さない、変わった奴です。

（青島あかり）

本編のヒロイン。

当初は、ツンツンしたキャラでしたが、途中から路線変更しました。ちょっとキャラがブレってしまった印象です。

容姿は登場した女の子の中では一番可愛い設定ですが、本人は容姿にあまり自信がないようです。

勘が鋭く、行動力があります。意外に、思っていることは、はっきり言います。

(高橋愛美)

和志の幼なじみ。

和志に振り向いてもらう為に、涙ぐましい努力をしますが、鈍感な彼には全く気付いてもらえません。

お喋りな奴ですが、肝心な所は表に出さず、行動力も有りません。そこが、あかりとの決定的な差です。

(青島ほのか)

あかりの妹。

物語上、意外に重要人物です。

容姿はあかりや母親と似ていますが、性格は母親似で、あかりとは似ていません。あかりは父親似なのでしょう。

(山本純子)

女子のクラス委員。

容姿端麗、頭脳明晰のスーパーガールですが、恋愛方面はあまり興味がありません。

和志同様、空気を読む術に長けています。

和志とあかりの關係に重要な役割を果たしています。

(水野健司)

和志の友人。愛美が好き。

当初はもつと暴れてもらう予定でしたが、出番はほとんどなく、中途半端なキャラです。

(河合沙織)

愛美の友人。

自分が一番だと思っているプライドの高い女の子。

容姿はあかりと同等レベルの美人ですが、あの性格では…。

皆さんも友達はやちゃんと選びましょう。

ちなみに、和志のことが好きですが、彼が自分に少しも興味を示してくれないので、腹が立ってます。

(和志の母)

平凡な主婦。

適当な性格なので、和志を混乱させることが多々有り。

あかりの母親のことは覚えていましたが、連絡はしていなかった模様。

(あかりの母)

子供二人を、女手一つで育てる決意をした行動力のある女性。彼女の行動力は、娘達にも受け継がれています。

苦労を感じさせない明るさが有ります。

家のことをやってくれるあかりには感謝しています。

あかりを信頼しており、あかりが選んだ和志なら間違いないと思っています。

以上、人物紹介でした。

あとは、番外編もあるので、良かったら読んで下さい。

少女Aからの電話（番外編）（前書き）

この番外編は、和志とあかりが付き合うことになった時の、愛美目線の話です。

少女Aからの電話（番外編）

その日の夜、私の携帯電話に着信があった。

あかりからの電話だった。

その時の私には、予感めいたものがあつた。

『もしもし、あかり？何かあつた？』

私は、いつも通りにあかりからの電話に出たつもり。

『ちょっと愛美に話があるんだけど…、今、大丈夫…？』

あかりの口振りから、間違いないと思った。

『大丈夫だよ。どうしたの？』

『…、えーと…、今日…、カズ君に…、告られた…。』

やっぱりね…。

『そ、そう、良かったね！付き合うことになったんだ！おめでとう  
』！

精一杯明るく祝福したつもり。

『ありがとう…。それで…。愛美には一番に報告しようと思って…。それで…。』

『もしかして、私のこと気にしてる？私は大丈夫だから、気にしないでいいのに。』

分かっていたことなのに、私はショックを受けていた。

でも、あかりには絶対に悟られてはいけない。

『うん…。でも…。ごめんね。。。』

『だから、謝らなくていいってば。きっと、二人はこうなる運命だったんだから。』

あかりにとって、和志は運命の人。

和志にとっても…。

和志の運命の人は、私ではない…。

『ありがとう…。』

あかりはそう呟くように言うと、黙ってしまった。

『…ねえ、あかりに聞きたいことがあるんだけど…。』

『…何？』

『今の話、まだ誰にも言っていないんだよね？』

『うん、そうだけど?』

『良かった!あかりが一番に私に報告してくれて。』

『どづいづいと?』

『だって、こういう話は仲のいい友達に言うものでしょ?それで、一番目が私っていうことが凄く嬉しい!』

『言っている意味がよく分からないんだけど?』

私の言いたいことはあかりに上手く伝わらない。

いつものあかりなら、すぐに気付いてくれるようなことなのに。

『私かね、あかりのことを親友だと思ってもいいのか!ってこと。』

『勿論、愛美がそう思ってくれるなら、私も嬉しい…。』

『私に話し掛けないで!って言った頃のアかりが懐かしいよ。』

『あつ、あの時の私は…、一体、何様のつもりだったんだろう、ホントにごめん!』

『もー、謝らないでって言うてるでしょ!』

『うん…。今日…、私…、彼氏と親友が一緒に出来ちゃった…。』

『それではあかりに、彼氏が出来た時の話を、じっくり聞くとしよ



うか。』

『今から?』

『勿論!』

『それは、言わないとダメ?』

『当たり前でしょ!親友なんだから。』

あかりとの長電話が終わると、私はやっぱり泣いてしまった。

あかりと話してる最中は、平気だったんだけどなあ…。

その日、私は和志のことで泣くのは、今日で最後にしようと思いつき決意する。

明日、和志の前で、上手く笑えるかなあ…。

そんなことを考えながら眠りについた。

次の日、あかりには涙の跡に気付かれましたが、和志には今まで通り接することが出来た。

私はもう大丈夫。

私の運命の人を探しに行かないといけないから…、なーんてね。

私と和志は七年間。

あかりと和志は、子供の頃に一年弱、高校では、わずか数ヶ月。

私の方が圧倒的に付き合いが長い。

それなのに、和志はあかりを選んだ。

ということは、そうなる運命だったに違いない。

私は、あかりと和志の間に置かれた、ちょっとした障害物に過ぎないのかも知れない。

でも私は、その役目を恨んではない。

和志という存在を通して、あかりという親友を手に入れることが出来たから。

仮に、私と和志が恋人同士だった場合でも、後から現れたあかりに、和志は惹かれていっただろう。

その場合、私とあかりの関係はもっと複雑になり、親友にはなれなかったかも知れない。

そう考えると、私は選択を間違えてはいなかったと言えるだろう。

あかりと和志にはいたのだから、私にも運命の人がきつというはず。

和志ではない、他の誰かが…。

それを探しに行かなくては。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5933o/>

---

少女Aと僕の日常

2010年11月17日01時51分発行